

健康文化

薫風閑話

高田 健三

携帯電話

今の世の中、よほど忙しくなったのだろうか、家を留守にする人が多いらしい。というのは、留守番電話を設置している家が増えているからである。そうとは知らずに電話を掛けると、何度かのコールサインの次に、突然、「ただ今留守にしています。ピーッという合図の後に、御用件をお話し下さい」というようなコメントがあった後、特徴のある電子音が鳴る。こちらは、先方が留守であるということを予期していないので、突然、一方的にこういう場面に遭遇すると、思わずまごついて、言葉に詰まってしまう。そうこうしているうちに、録音時間が切れる。御用件をどうぞといいながら、録音時間は決して長くない。そこを無理して喋ったとして、途中で時間切れになった時ほど、始末の悪いことはない。もう一度掛け直してその続きを録音するなど、間抜けもいいところである。そういう恐怖心も手伝って、「留守にして……」と声が聞こえると、すぐに切ることにしている。ところが、その時は、既に相手の電話機に繋がった後であるので、一通話の料金を取られると思うと、いまましいと思う。今は、国際電話も直通の時代である。もしも、海外から留守電にでも掛かったら尚更である。現在はどうなっているか知らないが、昔の「person to person call」が合理的であり懐かしい思いがする。

第一に、あの「ただ今留守に……」という声は、ほとんどの場合、極めて抑揚のないフラットなトーンで、まるで素っ気がない。最近の若者のように、電話が人との日常的繋がり的手段になっているのと違って、私の場合は用件があるから電話するのであって、お喋りを楽しむ趣味はない。ましてや、先方の電話の録音機に向かって話をするなど以ての外である。それよりも、適当に時間をおいて掛け直した方が私の性に合っている。しかし、相手の帰宅する頃合を見計らうというのも煩わしいものである。私の抵抗がいつまで続くか、自分でも自信がない。

電話といえば、ここ数年の携帯電話機の普及は目覚ましい。街の中で、電話

機を耳に当てながら歩いている若者の姿を頻繁に見かけるようになった。人で混み合う街角で、呼び出しのベルが鳴ると、付近の人が一斉に、自分の電話機を取り出す光景は、現代社会の一コマとして笑えぬものがある。余り使い慣れしていない私など、それを避けるためメロディーで呼び出しサインを差別化したものを持たされるが、どこかで音楽が鳴っていると聞き流してしまって、家に帰ってからお目玉を喰うのが落ちである。

顔を向き合せての会話は、お世辞にも上手とは言えない若者も、電話となると活き活きした表情になるから不思議である。子供の頃からファミコンゲームなどの器具との遊びで育った彼らの世界では、生身の対人関係より、「いつ、どこでも、だれとでも」が謳い文句の携帯電話が取り持つ人間関係の方が、心地よいのであろう。私にはなかなか理解できないが、そう思うことは、既に脳の化石化が起こっている証拠なのだろうか。その携帯電話も、アメリカのモトローラ社が打ち出した通信衛星システム、「イリジウム計画」が完成すると、世界中との通信が可能になるという。地球を取り囲むように77ヶの通信衛星でネットワークを作るこの計画は、原子番号77の元素、イリジウムに因んでつけられたといわれている。その後、技術的に66ヶでよいことになったが、それならば原子番号66に因んでジスプロシウム計画となるのであろうが、イリジウムという言葉が定着したためか、ペン先の合金の材料などとして人間生活により近い用途か、変更されていないようである。いずれにしても携帯電話の世界にも急速に国際化が進められているのである。銀座の並木道を歩きながら、シャンゼリゼのカフェのパリジェンヌに直接電話する日も遠くはないのである。その日のために、若者よ、せいぜい外国語会話の勉強をしておくべきではないか。

未来都市

1837年、モールスが発明した有線電信機によって、我々は新しい情報伝達方式を手に入れた。物理的距離を意識せずに、素早く情報が伝達できることは、当時の人々の意識構造に大きな変化を与えたことであろう。そして今日、テレビ、電話、コンピューターなどの手段を組み合わせた複合情報媒体を、更に繋いだマルチメディア技術の開発が進み、情報の多方向相互利用が可能になってきた。これが定着する21世紀には、社会構造も人間生活も、ドラマティックに変わると予想される。私など、情報社会の先端事情に疎い者には、興味津々ではあってもなかなか実感を伴わないのであるが、いくつかの大手ゼネコンが提案する21世紀未来都市という青写真などから、そのアウトラインを窺うことが

できそうである。

その青写真から浮かび上がる基本構想とは、超々高層ビル型集約都市と、大深度地下空間の利用となっている。高さ 800 メートルにも及ぶ超々大型高層ビルには、政治、経済、教育、医療などの機能を集約し、そこに勤める人や施設を利用する人達の住宅は、ビルを中心に円形に広がる緑地帯に配置される。また、数百メートルという大深度の地下空間に建設される超高速交通システムは、各都市間を結ぶ公害のない輸送機関として利用される。その結果、人の住環境に対する人口密度は飛躍的に減少し、人々は緑豊かな日常生活を楽しむことが可能になる。高度に整備されたインフラにより、都市全体は究極にまで進んだ機能を備え持ったマルチメディア社会になるという。まるで劇画の中の未来都市さながらである。

この未来都市に住むサラリーマンは、自宅にいながら、インターネットに接続されたパソコンを使って、国内外のニュース、ビジネスや産業など自分に必要な種々な情報を自由に拾い出すことができる。会社の会議には、モニターを通して在宅のまま参加し、取引先とはインターネットで商談を進められる。奥さんや子供達も、それぞれのパソコン端末を使って、ホームショッピングや在宅学習をし、必要以外は店や学校に行く必要がなくなる。もちろん、病気の際はモニターを通して医師が患者の状態を診察し、アドバイスを与えたりもできるという。既にその一部は始まっているが、現物主義の私にはわかり難い。できたらヴァーチャルリアリティの世界でもいいから、一度体験したいものである。

途方もなく見える超巨大な建築物が、技術的に可能であると聞かされると一瞬疑わざるを得ない。しかし人類の歴史を振り返ってみると、必ずしも驚くことはないのである。人類は今から 4500 年も前に、1ヶが 15 トンもあるような石材を積み上げて、150 メートルもあるピラミッドを造る技術を持っていたことは周知のごとくである。2600 年前には新バビロニアの王ネプカドネザルが、妃のアムヒアのために建てた空中庭園（吊り庭園）は、テラスを何層にも重ね、90 メートルにも達する高さを誇っていたという。数年前、その遺跡らしきものが海底で発見されたというアレキサンドリアのパロスの灯台は、13 世紀に地震で崩壊するまで、実に 1500 年もの間、海の道標として使われていた。180 メートルもの高さがあったとされるこの灯台は、2300 年前に造られたものと伝えられているが、人類は、高いものに挑戦する技術を数千年前から持っていたことになる。現代社会の象徴ともいえる高層建築は現代人だけの特技ではなく、有

史以前の人類から受け継がれてきた能力のなせる業なのである。そうとなれば、科学技術の遙かに進んだ今なら、未来都市の青写真も、あながち夢物語ではなさそうである。

遷都

21世紀の未来都市というと、私の頭に浮かぶのは、我が国の新首都計画のことである。数年来審議されて来た東京遷都問題が大詰めの段階に来ているという。移転先が現在挙がっている候補地のいずれにしても、もし実現されるとすれば、江戸が東京として首都に衣替えしたときとは違って、原野に近い土地を切り拓いて新首都を建設するという壮大な計画になることは間違いない。私の知る限りでは、何もない原野に首都として建設された都市として、ワシントン D. C. (アメリカ合衆国、1791)、キャンベラ (オーストラリア、1911)、ブラジリア (ブラジル、1960) などがある。特に、見事な計画・設計から生まれた20世紀のモデル首都といわれるキャンベラやブラジリアは、広大な土地を有する国であったから可能だったかもしれない。それに引き換え国土の狭い我が国では、利用できる土地は限られている。ゼネコンのプランはますます現実味を帯びてきそうである。いずれにしても政治機能を中心として、ハード、ソフトの科学技術の粋を集めたインテリジェント都市になることは間違いない。そこで活躍する人達にどんな人生が待っているのかにわかには予想できないが、余りにスマート過ぎて情緒の世界はどうなるのか人事ながら心配である。しかし、その頃の世界地理のテキストには、ブラジリアの次に、その新首都名が記されることは間違いないであろう。

1869年(明治2年)、京都から東京に首都が移されて、今年で丁度130年になる。政治・経済体制のみならず、教育制度もかつてないほどの大きな転換期を迎えている今、遷都を考えるのは時機を得たものかもしれない。決定までには、未だ紆余曲折があるにしても、国家百年の計であることには変わりない。我が国の歴史の中で、時代を画した遷都といわれるものは、政治に倦んだ人心を一新し、律令政治の再興を計るのが目的で決断された。最良の予言者は過去なり(バイロン)という。歴史の展開を長期的スパンで判断できる識者が、今の世の中にいることを信じたい。(平成11年5月)

(名古屋大学名誉教授)